



平成12年度  
国指定史跡山代二子塚環境整備事業に伴う  
発掘調査報告書  
— 山代二子塚古墳 —

2001年3月  
島根県教育委員会

## 例　　言

1. 本書は2000（平成12）年度に島根県教育委員会が国庫補助を得て実施した、国指定史跡山代二子塚環境整備事業に伴う発掘調査の調査報告書である。調査は環境整備工事に先立ち、史跡指定地内の構造の有無確認及び保護計画策定のための資料を得るために行った。
2. 調査組織は次のとおりである。

調査指導 渡邊貞幸（島根大学法文学部教授）

事務局 勝部 昭（文化財課長）、小田時通（課長補佐）、若槻真治（文化財係長）、小原拓生（同主任上事）

調査員 足立克己（埋蔵文化財係長）、椿 真治（同文化財保護主事）、池淵俊一（同）

調査参加者 荒川清子、梅原明枝、川見美智子、北垣澄子、高麗玉子、玉川敏子、森本鶴吉、水野千久子、柳浦正子

遺物等整理 荒川あかね、川上登志子、陶山佳代

調査協力 島根県立八雲立つ風上記の丘、ガイダンス山代の郷、松江市教育委員会、大庭公民館、山代原自治会

3. 発掘調査に際しては、角 雅孝、角 正治の両氏をはじめ地元の方々には終始多大な協力をいただいた。
4. 採図中のX・Yは、国土調査法による第Ⅲ系X・Y軸である。したがって磁北より7°12'、真北より0°32'東の方向を示している。矢印（N）も同様な方位を示す。
5. 遺物の図化は池淵・陶山が行った。本調査で出土または採集した遺物、及びこれにかかる実測図・写真は、島根県埋蔵文化財調査センターで保管している。
6. 本書で使用した山代二子塚測量図（第4図）は、昭和55～56年に島根大学法文学部考古学研究室によって測量され昭和57年に作成された図面の一部を、平成2年の発掘調査において実施した測量図をもとに修正したものである。調査区の配置図はこの測量図に位置を記入したものである。また第5図の山代二子塚測量図（S=1/600）は島根県教育委員会が平成9年度に空中写真撮影を実施し、平成12年度に作成した図面である。
7. 本書の編集は、調査員協議のうえ、池淵が行った。執筆は足立、池淵が行い、文責は文末、目次に示した。

## 目 次

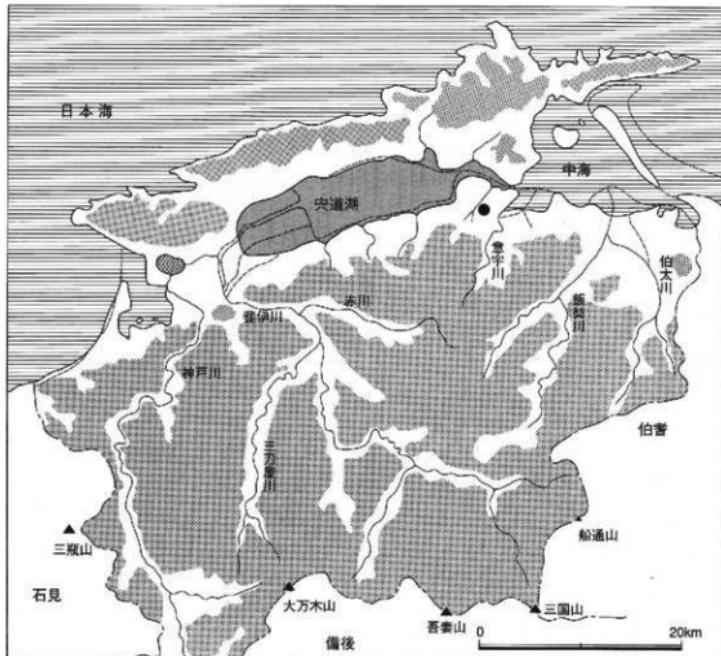
I 調査に至る経緯	(足立)	1
II 位置と環境	(池淵)	3
III 調査の経過	(池淵)	6
IV 調査の結果		
1. 検出した遺構	(池淵)	8
2. 出土遺物		12
(1) 墓 輪		12
(2) 須恵器		13
(3) その他		13
V ま と め	(池淵)	14

図 版

## I 調査に至る経緯

国指定史跡山代二子塚の所在する「島根県立八雲立つ風土記の丘」は、昭和47年に当時の文化財保護委員会（現文化庁）が推進していた「風土記の丘設置構想」に基づき、古代出雲文化に関連する重要な文化財を保存・活用する目的で、松江市南郊の意宇平野一帯をエリアとして設置された。翌昭和48年には八雲立つ風土記の丘資料館がオープンし、以後同資料館は県内の考古・歴史系博物館の中核としての機能を担ってきた。史跡の整備としては、風土記の丘設置当初に、出雲國府跡、出雲國分寺跡、大草古墳群、岡田山古墳の整備を行った。その後、同地内の重要遺跡の範囲及び内容を確認し、第2次整備方針を策定する資料を得ることを目的として、昭和48年より国庫補助金を受けて継続して地内各地の調査を実施することになった。

この「風土記の丘地内発掘調査」は昭和48年の出雲國分尼寺跡の調査から開始し、以後、平成元年度までに岩屋後古墳、団原遺跡（山代郷正倉跡）、茶臼山城跡、角畠遺跡、小無田遺跡、四王寺跡（山代郷南新造院跡）、黒田畠遺跡、下黒田遺跡、市場遺跡等の調査を行ってきた。このうち団原遺跡では多量の炭化米とともに大型倉庫群が検出され、「出雲國風土記」に記載されている山代郷正倉跡の中核部分であることが明らかにされ、関係諸機関と協議のうえ現地保存となり昭和55年



第1図 遺跡位置図  
（●印）〔古地理は約1,200年前の推定線『地質学論集』第36号1990年による〕

に国指定史跡に指定され、昭和58年までに第1次整備を完了している。

山代二子塚古墳は、大正年間にその存在が紹介されたのち、長らく本格的な調査は実施されず墳丘規模や築造年代についての詳細は不明のままであったが、1980年に島根大学考古学研究室によつて測量調査が実施された。この調査により墳丘規模がほぼ明らかになるとともに、周溝の外に外堤状の高まりが存在する可能性のあること、表採された埴輪や須恵器の年代から古墳の築造年代がそれまで言われてきた中期古墳ではなく後期古墳の可能性が高いことが指摘されるなど、当古墳の意義付けを行なう上で貴重な成果が得られた。

しかし、当古墳の周辺は市街化区域に指定されていることもあり、その頃から外堤付近に民家が建ち並ぶようになるなど、急速に古墳の保全に支障をきたす状況になってきた。また平成元年には、松江市立湖東中学校の建設に伴い山代二子塚古墳の北側をはしる市道山代矢田線の拡幅計画が持ち上がり、至急古墳の規模・範囲を確定し、開発との調整をはかる必要が生じたため、平成2年度より2ヶ年計画で当古墳の発掘調査を実施することになった（第1・2次調査）。

島根県教育委員会では、この調査結果をもとに保存すべき区域の検討を行い、当面の保存整備計画を立案し、関係機関と協議を重ねてきた。その後、「当古墳の整備事業が県の長期計画の戦略プロジェクトに組み込まれ、平成6年度より整備事業を開始することとなったが、具体的な整備計画を立案するにあたって、整備検討委員会を設置し検討した結果、委員から調査がまだ十分でないとの指摘を受けたため、平成6年度より2ヶ年で墳丘部周辺について補足調査を実施した（第3・4次調査）。

整備事業は平成7年度より着手し、平成9年度に墳丘盛土上層見学施設を備えた古墳本体部の整備を完了した。さらに平成10年3月には南の隣接地に山代二子塚古墳をはじめとした山代・大庭古墳群を紹介する「ガイダンス山代の郷」がオープンし、当古墳の整備事業は一応の完了をみた。

史跡指定地内である当古墳前方部の南側周溝・周堤部分（松江市山代町897-1・898-1）については、民家の裏庭に面していたこともあり買上げの同意を得るに至っていないかった。ところが、平成10年12月に至って地権者の一人から買い取ってほしいとの打診があり、地権者及び関係機関との交渉の結果、平成11年度にこの2筆について土地買上げを実施することとなった。併せてこの2筆の民家側の部分は、かつての敷地造成時の上取りによって高さ1～2mの崖になっており、當時外堤・周溝部の崩壊が進んでいることから、土地買上げ後の平成12年度に擁壁工事等の環境整備工事を追加で実施することとした。そして工事に先立ち、擁壁工事に伴って影響が想定される範囲について、造構保護との調整をはかるため発掘調査を実施する運びとなった。

（足立 克己）

## II 位置と環境

山代二子塚古墳は、島根県東部に位置する県都・松江市の南郊約4キロメートルの山代町字二子塚に営まれた墳丘長94mの前方後方墳である。付近には山代方墳、大庭鶴塚古墳、永久宅後古墳、向山1号墳などの大型古墳が集中しており、島根県を代表する古墳群である山代・大庭古墳群を形成している。

この山代・大庭古墳群の位置する茶臼山西麓から南麓の意宇平野にかけての地域は、古代出雲文化を代表する重要遺跡が集中する地域であり、現在島根県により「八雲立つ風上記の丘」が設置され、計画的に調査・整備が進められているところである。以下、当地内周辺の歴史的環境について概観してみたい。

「出雲國風土記」に「神名樋野」と記載されている標高171.5mの茶臼山の西麓一帯には、地質学的には乃木段丘と呼ばれる、県内では珍しいなだらかな段丘がひろがっており、層位的にも比較的安定していることから、当県では数少ない良好な旧石器時代の研究フィールドとなっている。現在確認されている遺跡としては、下黒田遺跡、市場遺跡などがあげられる。下黒田遺跡では、旧石器時代後期に属する玉髓製石核、剥片等が確認され、市場遺跡では黒曜石製の細石核が出土するなど、当地の黎明期の様相が徐々に明らかにされつつある。なお、山代二子塚古墳でも平成3年度の調査で川石器時代に属する可能性のある安山岩製剥片等が出土している。

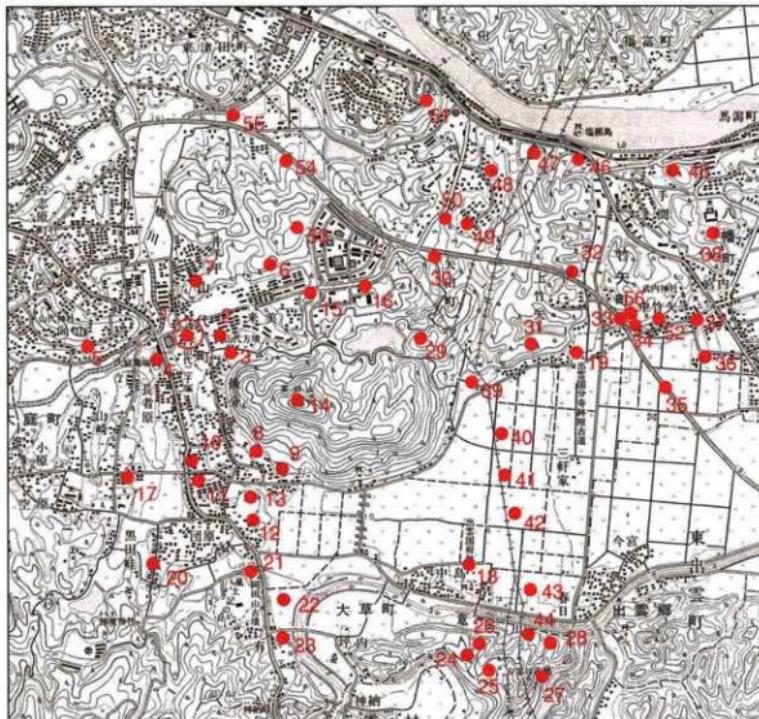
縄文時代の遺跡は現在のところ台地上では明瞭な遺跡は確認されていない。比較的内容の判明している遺跡としては、当古墳の西側を北流する馬橋川中流域の低湿地に立地する石台遺跡があげられる。当遺跡からは縄文後・晚期の上器が多く出土しているほか、網痕のある晚期土器も確認されており、当地域の稻作開始期をめぐる諸問題を考える上で重要な遺跡である。同じ平地部である意宇平野においても縄文後・晚期の上器を出土する遺跡がいくつか知られている。

当地域の弥生時代を代表する集落・生產遺跡としては、弥生中期の玉作関係資料が多量に出土した布田遺跡、弥生時代後期の玉作工房跡が検出された平所遺跡、弥生後期の水田跡や堰が確認された上小糸遺跡等があげられる。集落遺跡は、大雜把にいって、弥生前期後半～中期の遺跡は意宇平野など平地に立地し、中期末以降右台遺跡、勝負遺跡のように低丘陵部に拡大していく傾向が窺える。一方墳墓関連の遺跡としては、来美墳丘墓、間内越墳丘墓、的場墳丘墓といった四隅突出型墳丘墓が確認されている。当地域の四隅突出型墳丘墓は、一辺10m前後の比較的小規模なものが各小地域に点在している様相が認められ、大型の墳墓を含む四隅突出型墳丘墓が集中して営まれる安来、出雲地域とは対照的なあり方を示している。

古墳時代前期における当地域の様相は今一つ明らかではないが、最近調査された竹矢町社口1号墳は墳丘形態及び副葬品からみて、当地の弥生墓制とは一線を画するものであり、出土上器からも出雲部最古期の古墳と考えられ、当地の古墳時代開始期を考える上で重要な位置を占める。また茶臼山北東の丘陵上に位置する前方後円墳である櫛田1号墳は墳形から古墳時代前期に属する可能性が指摘されており、注目される。古墳時代中期になると、国史跡石屋古墳（方墳、一辺40m）、井ノ奥4号墳（前方後円墳、全長57.5m）、魚見塚古墳など当地北部の大橋川を望む丘陵上に有力古墳が次々と営まれ、同時期のものとしては県内でも有数の古墳群がこの地に形成されるようになる。

このうち石屋古墳、井ノ奥4号墳については松江市教育委員会により発掘調査が実施されている。

古墳時代後期になると有力首長の墓域は大橋川流域から支流の馬橋川をやや遡った茶臼山北西麓の台地上へと移動し、山代二子塚古墳をはじめ、大庭鶴塚（方墳、一辺約42m）、山代方墳（方墳、一辺約45m）、永久宅後古墳（墳形不明、整美な石棺式石室をもつ）等により構成される、出雲地方最大級の古墳群である山代・大庭古墳群が形成される。これらの古墳はこれまでの調査・研究により6世紀前半から7世紀前半にかけて營まれたものと考えられ、出雲東部の最高首長クラスの古墳群として位置付けられる。また当古墳群より約1km南の意宇平野西縁の丘陵上には、古天神古



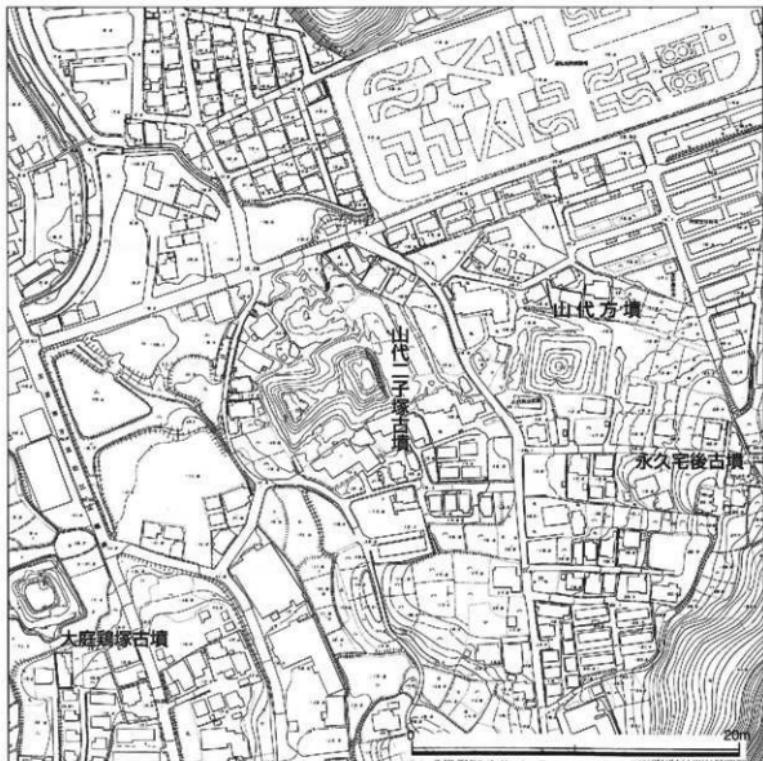
- |               |             |             |              |             |
|---------------|-------------|-------------|--------------|-------------|
| 1. 山代二子塚古墳    | 12. 団原古墳    | 23. 頂崎山古墳   | 34. 国分寺瓦窯跡   | 45. 潤山古墳    |
| 2. 山代方墳       | 13. 小舞田遺跡   | 24. 西百塚山古墳群 | 35. 布田遺跡     | 46. 竹矢岩舟古墳  |
| 3. 永久宅後古墳     | 14. 茶臼山城跡   | 25. 東百塚山古墳群 | 36. 宮内遺跡     | 47. 手間古墳    |
| 4. 大庭鶴塚古墳     | 15. 狐谷横穴墓群  | 26. 古天神古墳   | 37. 平浜八幡宮前遺跡 | 48. 井ノ奥古墳群  |
| 5. 向山古墳群      | 16. 十五鬼横穴墓群 | 27. 大草岩舟古墳  | 38. 道迎寺古墳群   | 49. 井ノ奥4号墳  |
| 6. 来美魔寺       | 17. 東潤寺古墳   | 28. 安部谷古墳群  | 39. 間内遺跡     | 50. 間内越塙丘墓群 |
| 7. 井手平山古墳群    | 18. 出雲国府跡   | 29. 砿田古墳    | 40. 上小紋遺跡    | 51. 石屋古墳    |
| 8. 市場遺跡       | 19. 出雲國分寺跡  | 30. 平所遺跡    | 41. 四配田遺跡    | 52. 出雲國分尼寺跡 |
| 9. 南新道跡(四王寺跡) | 20. 黒田畠土居遺跡 | 31. 上竹矢古墳群  | 42. 神田遺跡     | 53. 来美道路    |
| 10. 山代郷正倉跡    | 21. 因田山古墳群  | 32. オノ峠遺跡   | 43. 大屋敷遺跡    | 54. 勝負遺跡    |
| 11. 下黒田遺跡     | 22. 岩星後古墳   | 33. 中竹矢遺跡   | 44. 天満谷遺跡    | 55. 石台遺跡    |

第2図 山代二子塚古墳周辺の遺跡分布図 (1 : 25,000)

墳、御崎山古墳、岡田山1号墳、岩屋後古墳、団原古墳などにより構成される有・大草古墳群が存在し、いずれも比較的小規模ながら優秀な副葬品や石室を備えているものが多い。当古墳群は、墳丘規模や古墳群の位置関係、出雲型子持壺や石棺式石室など古墳祭式の特徴等の点からみて、出雲東部の最高首長である山代・大庭古墳群の被葬者を補佐する有力首長クラスの奥津城と考える意見が有力である。

律令期においても、意宇平野の南に出雲国府跡が置かれるなど、当地域は引き続き出雲国の中心的位置を占めており、これに関連する数多くの遺跡が残されている。代表的な遺跡としては、出雲国分寺跡、国分尼寺跡、山代郷正倉跡、山代郷北新造院跡（来美廃寺）、同南新造院（四王寺跡）などがあげられる。現在国庫補助事業として実施中の風土記の丘地内遺跡発掘調査事業では、将来的な整備に備えた範囲及び内容確認を目的として、出雲国府跡、来美廃寺を発掘調査を継続的に実施しているところであり、出雲国府跡では四面庇付大型建物跡が検出されるなど、貴重な成果が得られつつある。

（池淵俊一）



第3図 山代ニ子塚古墳と周辺の古墳 (S = 1 / 3000)

### III 調査の経過

古墳の現況 山代二子塚古墳は、周囲の市街化が進むなか比較的保存状態の良好な古墳である。墳丘は後方部の約1/3が戦前の陸軍歩兵第63連隊設置の際の土取りによって削り取られているものの、その他の部分の遺存状況は比較的良好である。平成6~9年度にかけて整備事業を実施する以前の段階では、墳丘東側には周溝と考えられる地形の落ち込みや外堤と考えられる土壠状の高まりが明瞭に観察された。一方墳丘南側については民家が建ち並びまた墳丘裾部が一部削平されていることもあって、周溝・外堤の存在については、表面上の観察では墳丘東側ほど明確には確認できない状況であった。整備後の現在は、後方部の墳丘が削平された部分については復元盛土がなされ、内部は後方部の盛土の状況がつぶさに観察できる施設が整備されている。また墳丘、周溝、外堤については芝張による整備が行われており、全国有数の前方後方墳の全容が体感できる古墳公園として全国各地から多くの見学者が訪れる名所となっている。なお、当古墳の復元整備の詳細については、本年度刊行の「山代二子塚古墳整備事業報告書」を参照されたい。

調査区の設定及び調査の経過 調査に至る経緯についてはI章で既にふれたとおりであり、平成11年度に新たに買収した墳丘南側部分について、擁壁・防護柵等を設置する史跡環境整備工事に先立ち、遺構保護との調整を図るために実施したものである。調査区域は擁壁・排水工により実際に影響が想定された民家側の約100m<sup>2</sup>である。

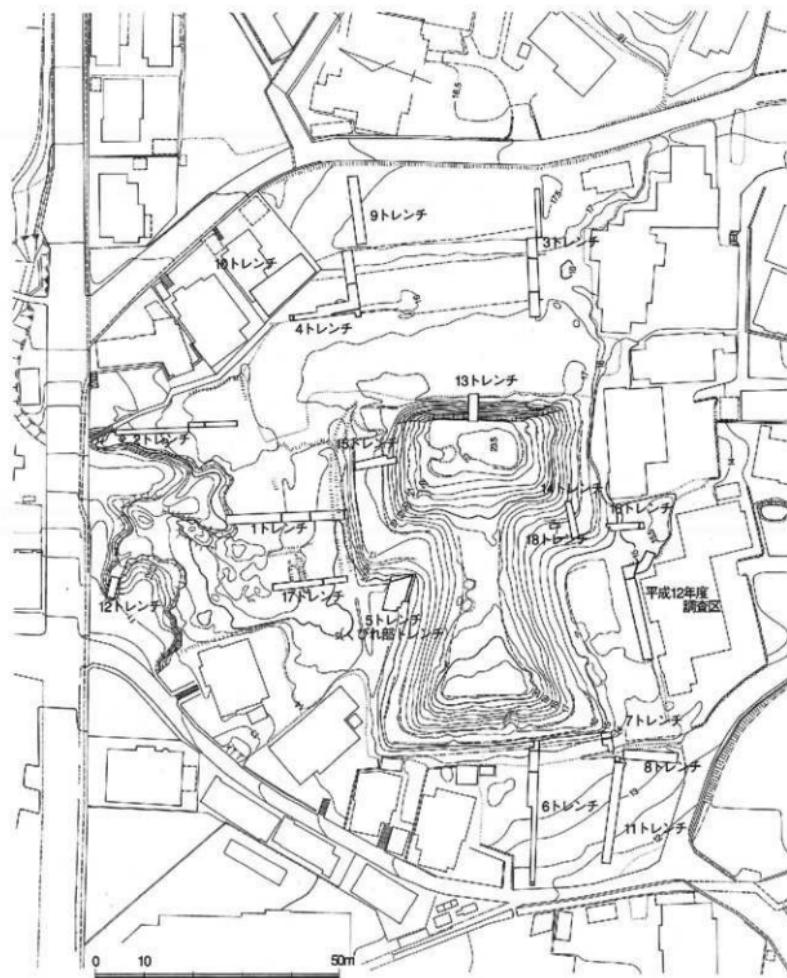
現地での調査作業は平成12年7月13日から開始し、途中中断期間を挟みながら同年7月21日に終

了した。遺物整理作業は遺物の水洗・注記作業を現地調査と平行して実施し、翌平成13年1月に報告書作成作業を行った。また現地調査終了後の8月19日には鳥根大学法文学部教授・渡邊貞幸先生に現地にて調査指導をお願いした。

(池淵俊一)



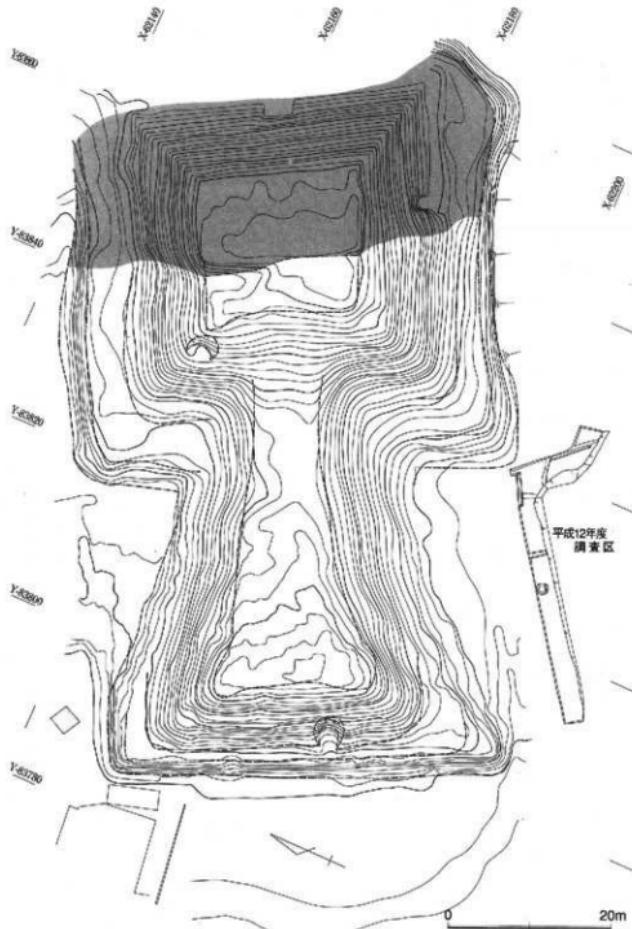
整備工事中の山代二子塚古墳（平成9年度）



第4図 山代ニ子塚古墳調査区配置図

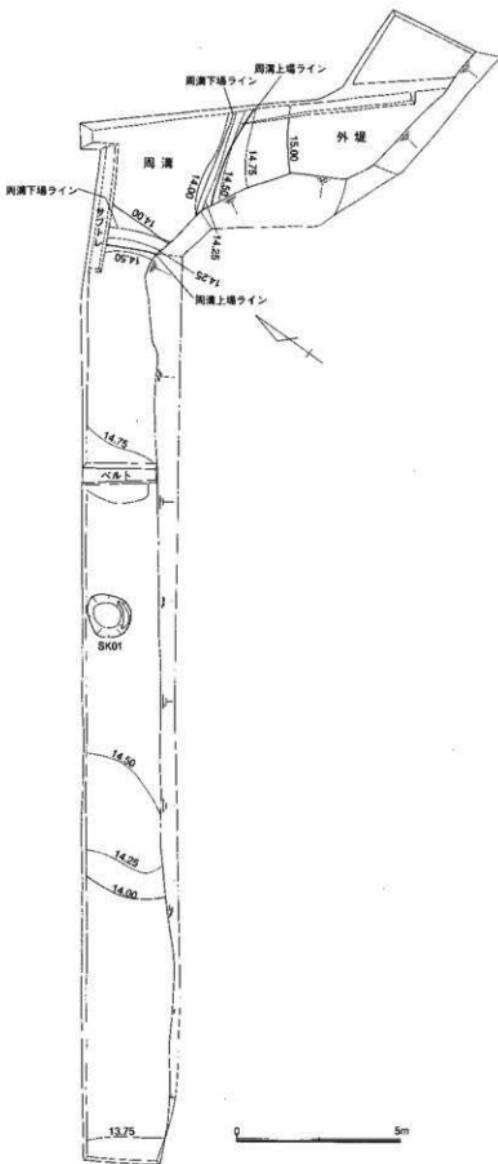
## IV 調査の結果

平成12年度調査区は墳丘南側の後方部西側からくびれ部、前方部にかけての区域で、外堤および周溝の存在が想定されていた箇所である。調査区はほぼ前方部に沿って東西に延びる長さ約36m、幅2~3mの、長いL字形状を呈する。調査の結果、後方部からくびれ部に至る周溝の一部を確認するとともに、前方部側で近世墓と想定される土塚墓1基を検出した。



第5図 山代ニ子塚古墳測量図 ( $S = 1/600$ )

\*トーン部分は整備工事による盛土範囲を示す



第6図 山代二子塚 平成12年度調査区全体図 ( $S = 1/150$ )

## 1. 検出した遺構

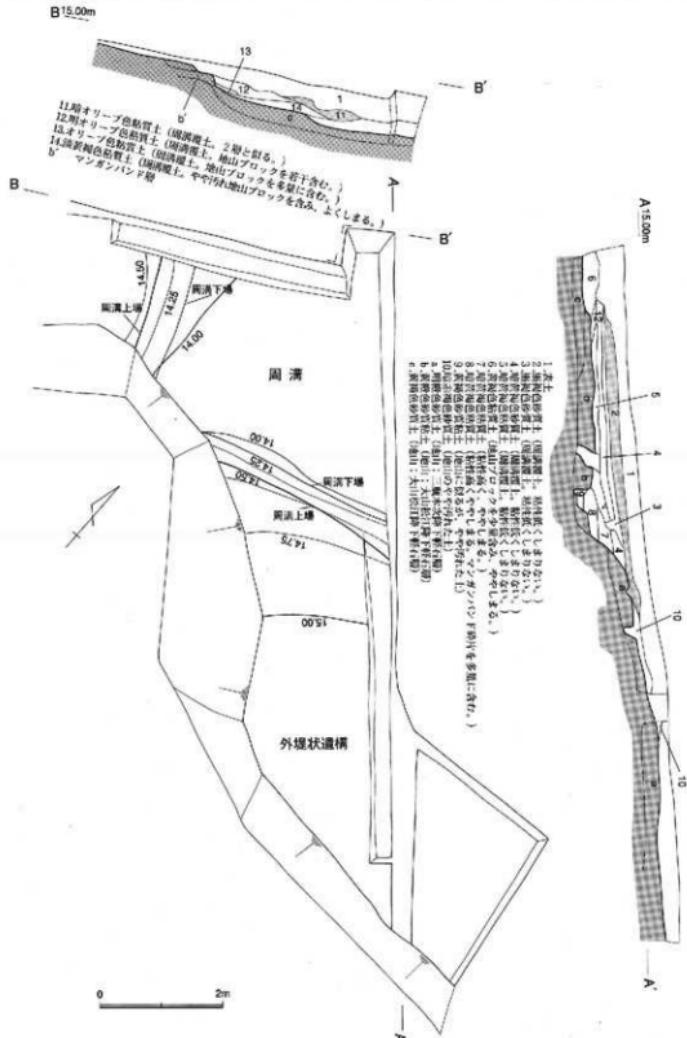
### (1) 古墳に伴う遺構

#### 周溝（第7図）

検出された周溝は、周溝底面より外堤部と想定される周溝外側にかけての部分であり、墳丘側の立ち上がりは確認できていない。調査区域内で検出された周溝は、後方部側の東から伸びてきたのが、ほぼ直角に北へ屈曲する状況で検出されており、ちょうどコーナーに該当する部分と考えられる。このことから墳丘南側の周溝については、墳丘の形状をなぞるようなかたちでめぐっていた可能性が高い。

周溝の形状は断面箱型状を呈しており、立ち上がりは比較的急だが、西側の立ち上がりはやや緩やかである。周溝の深さは、現状で南側立ち上がり部で72cm、西側立ち上がり部で46cm前後をはかる。周溝底面は断面観察では墳丘側に向かってやや傾斜している。周溝底面の標高は、14.2~14.3mであり、平成7年度に調査した当調査区のすぐ東に位置する16トレンドで検出した周溝床面レベルよりやや下がっている。なお、当調査区の周溝床面は周溝内下層覆土との判別が極めて困難であったため、床面については一部掘り抜いてしまっている。したがって第7図中の周溝床面付近の等高線は、周溝の現況を示すものではないことをお断りしておく。

周溝は地山を掘り込んで整形されている。当調査区の地山は、地質学的にみると三瓶木次降下軽石層（a層；明橙色砂質土）、大山松江降下軽石層（b層；黄褐色砂質粘土）の順に堆積しており、その間にマンガンや鉄分が沈着してきたマンガンバンドが堆積している。当調査区で検出された周溝は、三瓶木次降下軽石層及びマンガンバンドを掘り抜き、底面は大山松江降下軽石層のなかに達している。この点で、周溝底面がマンガンバンド上面に合わせて作られている埴丘北・東側の状況



第7図 平成12年度調査区周溝付近平面図・土層図 ( $S = 1/80$ )

況とはかなり様相が異なっている。

周溝内土層の堆積状況は、底面付近に前述のとおり地山との区別が困難な黄褐色系粘質土（5層）が厚さ10cm前後、その上にやや暗い黄褐色系の砂質土（4層）が10cm前後凹面状に堆積している。5層は地山がやや汚れた程度の土であるが、1点のみではあるが円筒埴輪片が出土していることからみて（第7図・図版4）、周溝内覆土であることは間違いない。4層の上には、暗褐色砂質土（3層）、黒褐色砂質土（2層）の順で堆積している。周溝底部付近の4・5層は汚れの少ない比較的きれいな土であり、周溝掘削時からあまり時期を離れて堆積したものである可能性が高い。周溝内覆土からの出土遺物はその大半が表土（1層）及びその下の2層（黒褐色砂質土）中からの出土であり、円筒埴輪片、須恵器片が出土している。また、検出された周溝床面の、南側の外堤側立ち上がり部付近は、他の底面より約30cm程深く溝状に掘り込まれている。この落ち込み部内の覆土は、土層観察より周溝底面全体に覆土が堆積する以前に堆積したものであり、周溝掘削後の周溝内に覆土が堆積するより以前に掘り込まれたものと想定されるが、その性格は明らかではない。一案としては周溝を一旦掘削した後、掘り過ぎの部分を埋め戻して整えた箇所である可能性も考えられる。なお、先述の当調査区に隣接する16トレンチにおいても、やはり周溝外堤側に同様な溝状の掘り込みが確認されている<sup>(1)</sup>。

#### 外堤（第6図）

外堤に相当する区域と考えられている周溝外側の部分については、いずれの箇所も地山削り出しによるもので、盛土は一切認められない。また外堤とその外部を区画する溝、地山変換点等も今回の調査区内では確認することはできなかった。現存での地山最高所地点は調査区東南部の後方部南側の高まりで、標高15.3mを測り、西側へ行くに従い徐々に下がっている。

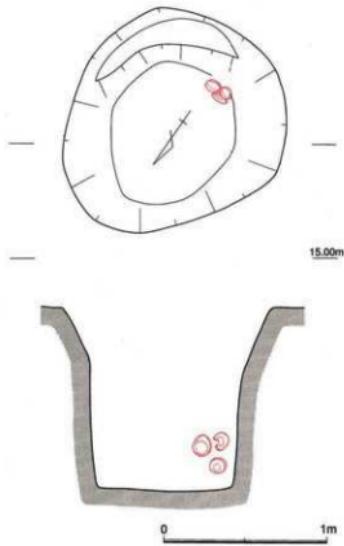
#### (2) その他の遺構

##### S K01（第8図）

調査区中央付近の、周溝外側に相当する箇所で検出した土坑である。平面形は不整形な楕円形状を呈し、規模は長径1.47m、短径1.30mである。

掘り形は南側は一部二段掘状を呈し、中程以下はほぼ垂直に掘り込まれ、深さ1.1mを測る。床面はほぼ水平である。覆土はしまりのない暗褐色土が堆積していた。出土遺物は、土坑南側壁付近から床面からやや浮いた状態で土師質土器が3点出土している。土師質土器はいずれも底面を壁面側に向け、直立する状況で検出された。

当遺構は、土坑の形状や出土遺物からみて、座棺を埋置した近世墓である可能性が高いと考えられる。



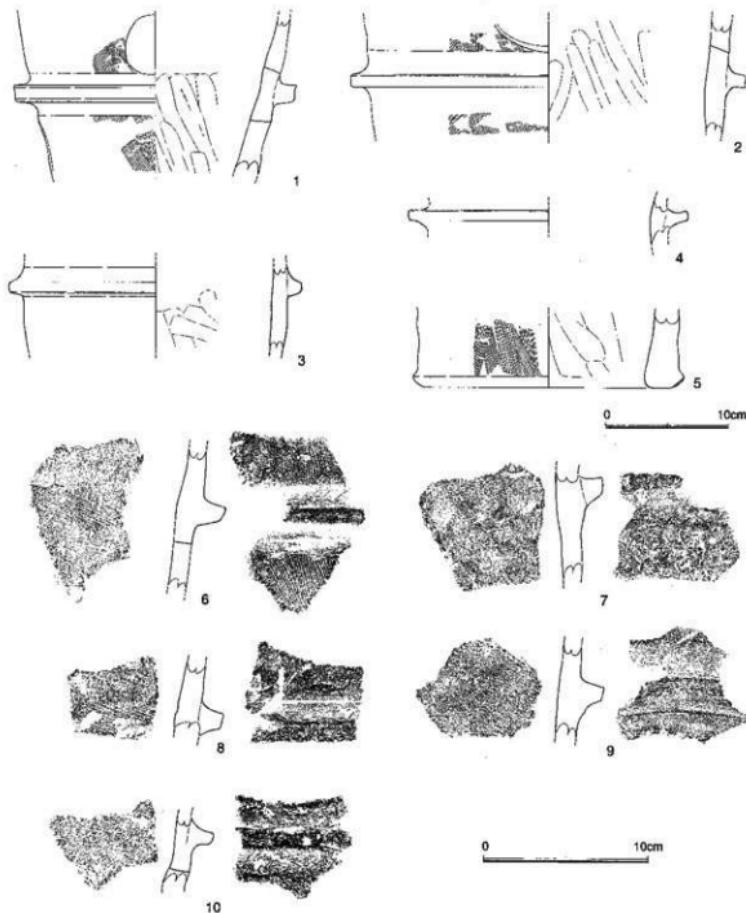
第8図 山代二子塚SK 01実測図 (S=1/100)

## 2. 出土遺物

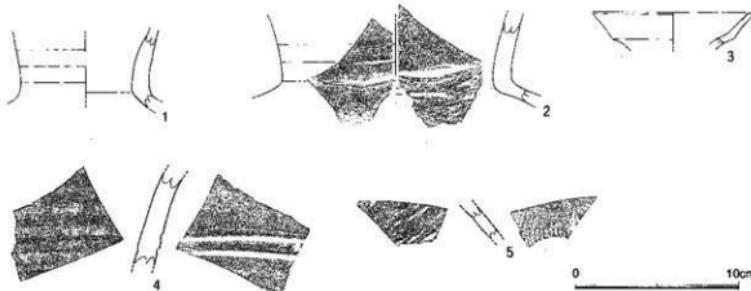
当調査区からは、埴輪、須恵器のほかSK01から上師質上器が出土している。以下、埴輪、須恵器、上師質上器の順でその概略について記す。

(1) 墓輪 (第9図) 墓輪はコンテナ2箱分が出土しており、ほとんどが円筒埴輪の破片である。形象埴輪の可能性のある破片は1点ほど出土しているが、細片のため図化していない。埴輪の部分名称は過去の当古墳の発掘調査報告と同様、『出雲岡田山古墳』報告に準据する<sup>(2)</sup>。

1は比較的大型の胸部破片で、タガを挟んで上下に互い違いに円形スカシが穿たれている。外面



第9図 出土遺物実測図 (1)



第10図 出土遺物実測図 (2)

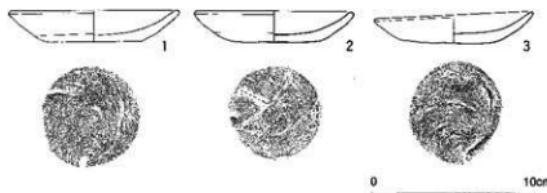
は1次調整のナナメハケ、内面はタテ方向のユビナデを施す。焼成は上師質で黒斑は認められない。2も同様に胴部片であり、タガ部での復元径が32.0cmを測る。調整及び焼成は1と同じである。5は底部の資料である。器壁はかなり厚く、底部調整が無いように見受けられ、当古墳出土の埴輪としては特異な資料である。調整は1と同様に外面タテハケ、内面に縱方向の粗いユビナデを施す。6~10は小型の胴部片で、いずれも焼成は土師質で黒斑は認められず、外面は1次調整のタテ・ナナメハケを施す。6、8~10は内面調整にナナメハケを施している。また6、10には円形スカシが認められる。

(2) 須恵器 (第10図) 当調査区では小片5点が出土したのみである。1・2は甕もしくは壺の頸部資料である。2はやや大型のもので、頸部内面に同心円状当具痕を残す。3はSK01の覆土中から出土した子持壺の了戸口縁部と考えられる資料で、復元口径9.8cmを測る。口縁部は大きく開き、やや退化した段部を有する。内外面ともヨコナデ調整で仕上げる。4は大壺の頸部資料で外面に2条の区画沈線が認められる。5は比較的小型の壺の肩部と想定されるもので、外面は平行タタキのちカキメ調整、内面は同心円状当具痕をナデ消している。

(3) 土師質土器 (第11図) 1~3ともほぼ同形同大の土師質土器小皿である。口径9.6~10.4cm、器高2.0cm前後を測り、体部はほぼ直線的にひらくタイプのものである。調整は、内外面とも回転ヨコナデであるが、3は内面底面を不整方向のナデで仕上げている。底部にはいずれも回転糸切り痕が認められる。

註 (1)島根県教育委員会 1996 [風土記の丘地内追跡発掘調査報告書11-山代二子塚古墳-]

(2)島根県教育委員会 1987 [出雲岡田山古墳]



第11図 SK01出土遺物実測図

## V ま と め

### 1. 墳丘形態について

今回の調査区を設定した墳丘南側は、平成2年度から7年度にかけて4次にわたって実施してきたこれまでの調査ではほとんど調査できていなかった区域であり、壇幅付近については唯一平成7年度に後方部南西隅付近で16トレンチの調査が行われているのみである。今回の調査は、墳丘形態を明らかにするという学術目的で実施したものではないが、幸運にも周溝の一端を探り当てることができ、今後当古墳を検討していくにあたっての重要な知見が得られたものと考えている。

今回検出した周溝は、外側立ち上がり部分しか確認できておらず溝底幅は不明であるが、平成7年度に調査されたすぐ東側の16トレンチでは幅6.6mを測る。この数値は3トレンチや1トレンチで検出された後方部東側・北側部分の周溝幅とほぼ同じであり、後方部南側についても北側とほぼ同様な幅の周溝がめぐっていたようである。

周溝底面のレベルは約14.3mであり、16トレンチの周溝底面よりやや低くなっている。既に指摘されているとおり、当古墳は茶臼山西麓の、東から西へ延びる台地上に立地しており<sup>(1)</sup>、周溝底面も東から西に行くにつれ徐々に低くなっている。墳丘の東・西・北側については、周溝底面は大山松江降下軽石層の上のマンガンバンド上面に設定されているが、墳丘南側ではマンガンバンドを掘り抜き、北側くびれ部とほぼ同様なレベルを意図して溝底面が設定されている。

本文中に述べてきたとおり、今回の調査区内で検出された周溝は、後方部南西コーナーに沿うようにめぐっており、ちょうどその周溝の隅に相当する部分を検出したことになる。当古墳の周溝形態については、平成2・3年度調査の成果をとりまとめた報告書では、周溝外郭が長方形となる形状が想定されている<sup>(2)</sup>。これは報告中でも述べられているとおり、墳丘南側の調査データは全くなく、墳丘北半部との対称を考慮して想定されたものである。また比較的調査が行われている墳丘北側についても、第2次調査で北側くびれ部に設定された5トレンチでは周溝外側の立ち上がりは確認されていない。つまり周溝外郭が長方形状を呈する点について明確な根拠は現状では存在しない。

かつて島根大学が実施した測量調査では、南北くびれ部外側は長二角形状を呈する盆地状の窪みとなっていた点が指摘されており<sup>(3)</sup>、現況の測量図（第4図）でも、前方部南側にある先述の窪みの外側に、前方部とほぼ平行して緩やかな高まりが延びている状況が認められ、墳丘北側についても、墳丘の北側から北側くびれ部に向けて張り出している高まり（標高15.0mの等高線）が読みとれる。先述の復元想定図では周溝外郭線がこの墳丘南北に認められる高まりを取り込んだ形で想定されているが、やや不自然な印象を受ける。今回の調査知見を踏まえると、むしろこの現況で認められる窪みが、ある程度周溝の形状を反映していると考え、墳丘南北両側とともに墳丘の形状に沿って周溝がめぐっていた可能性も考慮すべきではなかろうか。いずれにせよ、周溝の形状については、今後の発掘調査等により確認すべき重要な課題である。

### 2. 出土遺物について

#### (1) 円筒埴輪

埴輪はその大半が表土中より出土しており、周溝覆土から出土しているものは本文中にも述

べたとおり1点しかない。おそらく中段テラス方面からの流れ込みによるものと想定される。外堤部分からは埴輪は検出されていない。

埴輪はそのほとんどが円筒埴輪であり、口縁部は出土していない。タガの形状、調整、スカシの配置などは、これまでの調査で出土しているものと同様である。底部は1点出土しているが基底部が厚く、底部調整のないものである。当資料は平成7年度の県費調査で当調査区に近接する後方部テラス(14トレンチ)から出土した四足獣と想定される形象埴輪脚部に類似していることから、形象埴輪等の底脚片である可能性も考慮される。

## (2) 須恵器

当調査区出土須恵器は子持壺の子壺口縁部が1点出土しているほかは、壺、甕の破片が若干出土しているのみで、細かな年代の位置付けは困難である。ここでは過去の調査出土資料を含め、当占墳出土の子持壺の位置付けについて若干触れておく。

当古墳の子持壺については、第1・2次調査の報告では松江市山代町岡田古墳例よりも明らかに古く、鹿島町向山古墳例、松江市法吉町岡田薬師古墳例などに近い時期に位置付けられている<sup>(1)</sup>。これに対し、山陰の子持壺を集成・検討した柳浦俊一氏は共伴遺物、子壺の接合手法、全体のプロポーションの検討から氏分類の有脚Ⅳ類(いわゆる従来の出雲型子持壺)のなかでも新相(山本編年Ⅲ~Ⅳ期)に位置付けており、若干のズレが認められる<sup>(6)</sup>。

筆者もかつて出雲型子持壺(柳浦氏分類有脚Ⅳ類)について、若干検討を加え、各属性の変化、相関関係を検討したうえ、概ね3段階の変遷試案を述べたことがある<sup>(6)</sup>。

I段階…出雲型子持壺が定型化する前の段階で、親壺の底がない点のみ共通する。子壺は数が5個以上で子壺は口縁部、頸部、胴部の区分が明瞭で文様を施すものがある。親壺はスカシを持たず大型で胴部が比較的よく張り、脚部との境が比較的明瞭。口縁部は环身状か、長く広がる形態を呈する。脚部は広がる形態が多く、脚下半部にもスカシを穿ち、脚端部が段状に肥厚するかもしくはその痕跡をとどめる。脚部の調整は下半部をヨコナデ調整で仕上げるものが多い。鍔状突帯は基本的にない。(鹿島向山古墳、岡田薬師古墳、宗像1号墳、手間古墳)

II段階(古)…出雲型子持壺の定型化が進む段階。口縁部形態は頸部がやや短く外反し端部が段状をなす形態にはほぼ統一される。鍔状突帯を伴うものや親壺にスカシを穿つものが出現する。脚部は下半部からスカシが消失し、調整も粗い縦方向のナデが主流となり最終的なヨコナデも脚端部等に限定される。次段階に比べて親壺がまだ大きく、子壺がまだ5個以上存在する段階。(岡原古墳、島田池6区15号横穴墓例)

II段階(新)…出雲型子持壺の定型化が完成する段階。子壺はほぼ4個に統一され、前段階に統いて子壺が配置された間の親壺胴部には円形スカシが穿たれる。親壺の口縁部形態はII段階(古)とほぼ同じで、親壺は小型化し、胴部の張りも弱くなり鍔状突帯をもつものが多い。脚部はやや「ハ」字状に直線的に広がるものが多い。(鳥取県上野遺跡、松江市向山1号墳、島田池1区3号横穴墓例)

III段階…出雲型子持壺の形骸化が進行する段階。親壺がさらに小型化し、子壺は形骸化が進行し、口縁部と頸部が一体化するものが多くなる。(山代方墳、出西子丸1号墳、的場横穴例)

共伴遺物の細かな検討等、充分な検証を行ってはいないが、現状での資料では概ねこれで子持壺の型式変化の方向性を示せるのではないかと考えている。山代二子塚古墳出土の子持壺をこの流れに位置付けるならば、Ⅰ段階に属するものと考えて差し支えない<sup>(7)</sup>。当古墳から出雲型子持壺とともに親壺の底部がある脚付子持壺（有脚Ⅲ類）が出土している点も、当古墳を古く位置付けるに有利な材料である。

各段階ごとの分布を検討してみると、Ⅰ段階の出雲型子持壺（有脚Ⅳ類）は米子周辺に若干存在する他は松江北部にほぼ限定され、松江南部では当古墳以外では知られていない。ところがⅡ段階以降、意宇平野周辺に集中的に認められるようになり、また点的ではあるが安来・米子・倉吉、出雲など各地域に広がる状況が認められ、Ⅰ段階の分布状況とは大きく異なっている。

出雲型子持壺については、他地域の子持壺とは異なり、円筒埴輪のように埴丘上に立て並べられる独特の使用法など、出雲東部勢力による独自の埴丘祭祀に用いられたものと想定されている<sup>(8)</sup>。当古墳出土の子持壺は松江南部では最古の子持壺であり、かつその出土状況からみて埴丘上に多量に立て並べられていた可能性が高い。こうした点からみて、それまで単なる松江北部地域のローカルな一祭祀用須恵器であった「出雲型子持壺」が、山代二子塚古墳の築造を契機に、出雲東部勢力首長層により当地域独自の埴丘祭祀を執り行う上で重要なアイテムとして採用され、その後出雲東部全城に急速に普及していく可能性も考慮される。

以上のように、当古墳出土の子持壺は系譜や編年、またその性格の変化を探るうえで重要な鍵を握る資料であり、今後のさらなる調査研究が期待されるところである。

## 註

- (1) 渡辺貞幸 1983『松江市山代二子塚をめぐる諸問題』『山陰文化研究紀要』第23号
- (2) 島根県教育委員会 1992『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書—山代二子塚古墳—』
- (3) 註(1)と同じ。
- (4) 註(2)と同じ
- (5) 柳浦俊一 1993『島根・鳥取県出土子持壺集成』『島根考古学年報』第10集
- (6) 池淵俊一 1995 第5回横穴墓調査検討会「子持壺の配置とその時期」(口頭発表)  
なお、当発表内容については、それ以前に「古代出雲文化展勉強会」において丹羽野裕氏と共に発表した内容をもとにしたものである。
- (7) 当試案は柳浦編年を否定するものではなく、実際氏が古・新縦分のメルクマールとした、親壺が大きく不安定な器形から親壺が小型で安定した器形への変化は概ね妥当なものと思われる。ただその視点で当古墳出土の子持壺を素直に見れば古相に属すると考えた方が自然ではなかろうか。問題は共伴したとされる伝世品の有蓋高环であるが、大谷晃二氏による編年では出雲3期を下限とする器種であり、仮に当古墳に伴うものであっても氏の想定(山本Ⅲ期新)よりや古くなると考えられる。
- (8) 大谷晃二 1994『出雲地域の須恵器の編年と地域色』『島根考古学年報』第11集
- (9) 大谷晃二 1997『「出雲国」の支配者たち』『古代出雲文化展』島根県教育委員会・朝日新聞社

図版 1



山代ニ子塚古墳 平成12年度調査区（垣根と民家の間・後方部墳頂より）



同 上（前方部墳頂より）

図版 2



周溝完掘時（西側より）



同上（東側より）



周溝完掘時（西側より）

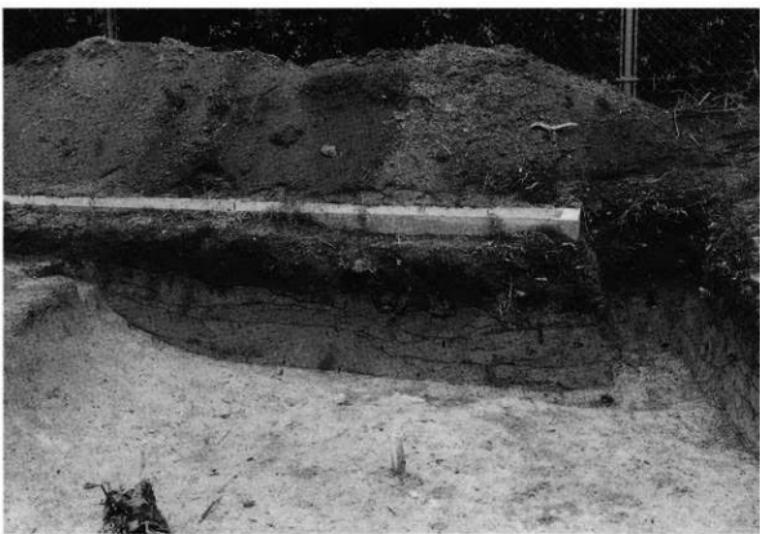


調査区東壁周溝部セクション（西側より）

図版 4



調査区東壁セクション拡大（西側より）



調査区北壁周溝部セクション（南側より）



SKO1 (西側より)

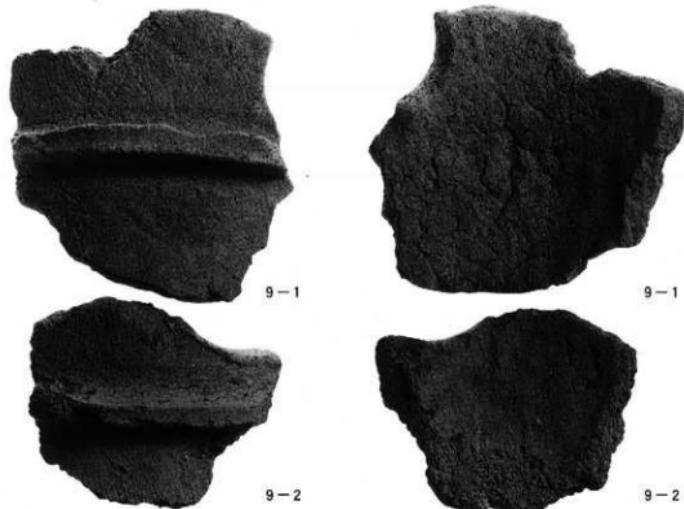


同遺物出土状況 (西側より)

図版 6

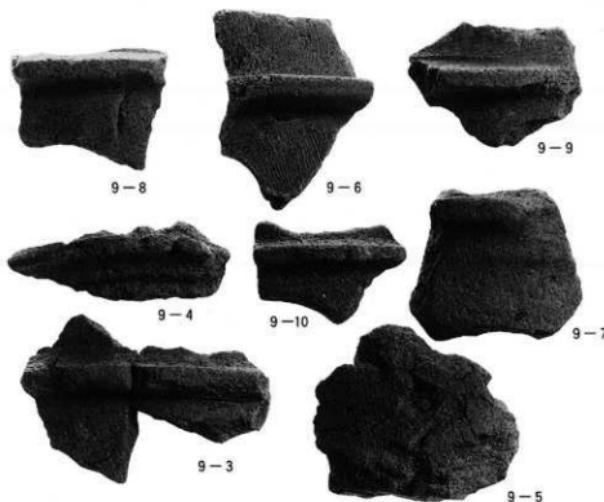


平成12年度調査区南側調査風景（東側より）

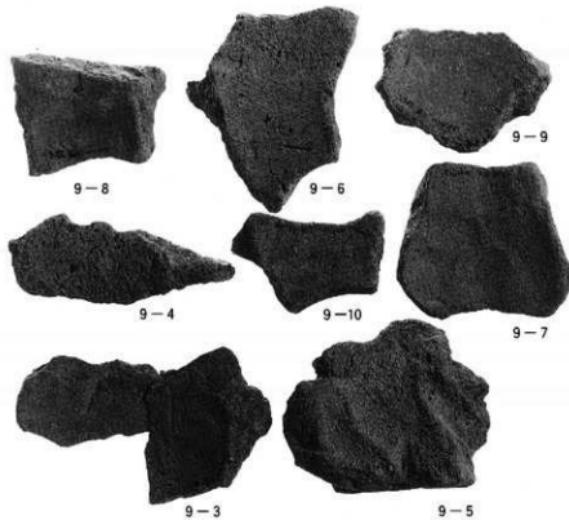


平成12年度調査区出土遺物 増輪 (1)

図版 7

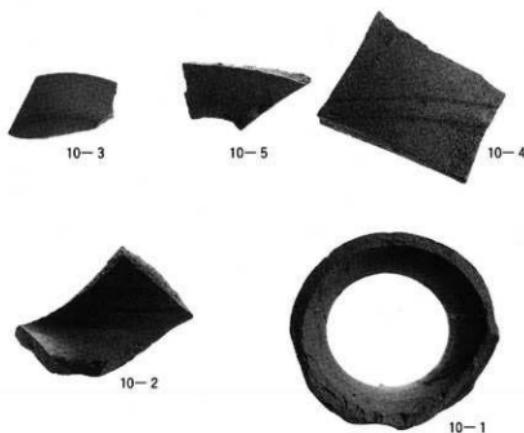


平成12年度調査区出土遺物 塚輪 (2)

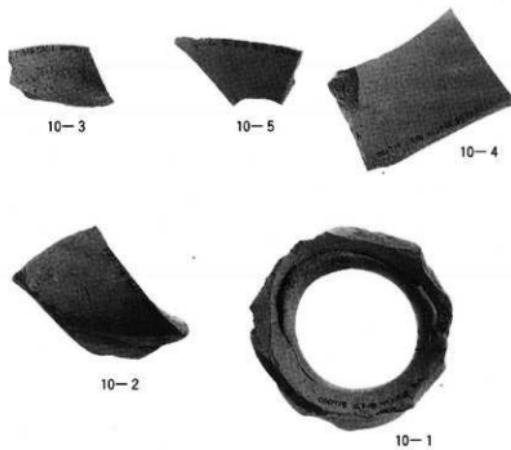


同上

図版 8



平成12年度調査区出土遺物 須恵器 (1)



同 上



平成12年度調査区SK01出土遺物 土師質土器



同 上

# 報 告 書 抄 錄

フ ロ ダ オ	ヤマシロツクタノイカヨン										
事 名	山代二子塚古墳										
副 書 名	平成12年度山代二子塚古墳環境整備事業に伴う発掘調査報告書										
番 号											
シリ 一ズ 名											
シリ 一ズ 番 号											
編 著 者 名	足立 高己 潤澤 僚一										
編 編 機 關	島根県教育委員会										
所 在 地	〒690-0000 島根県松江市殿町1番地 TEL0852-22 5880										
発 行 年 月 日	西暦2001年3月30日										
フ ロ ダ オ リ ガ ナ コ ー 一	北	南	東	西	調査期間	開 売 面 積	調査原 因				
所 収 遺 物 名 所 在 地 市 町 村 遺 物番 号											
ヤマシロツクタノイカヨン シマキケン 山代二子塚古墳 島根県 マツエシ 松江市 ヤマシロツク 山代町 897-1外	322016	D39	35 26 8	133 05 21	20000713 ～ 2000731	100m <sup>2</sup>	史跡整備事業				
所 収 遺 物 名 極 別 主な 時 代 主な 遺 構 主な 遺 物 特 記 守 場											
山代二子塚古墳 古墳 (前方後方墳)	古墳時代後期	円溝 外縁	円筒埴輪 形象埴輪 須恵器	周溝の一帯を検出し、周溝及び外縁の規模・形状を検討する資料を得た。							
	近世墓 川戸時代～	土坑1基	土師質七器3								

国指定史跡山代二子塚環境整備事業に伴う  
発掘調査報告書  
— 山代二子塚古墳 —

2001年3月

発行 島根県教育委員会  
〒690-8502 松江市殿町1番地

印刷 千鳥印刷株式会社  
松江市黒田町484-15